

---

# 魔法少女リリカルなのは～全てを穿つ凡才の拳～

山の子歳々

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜全てを穿つ凡才の拳〜

### 【Nコード】

N5425Z

### 【作者名】

山の子歳々

### 【あらすじ】

一人の凡才武道家は壮絶な努力の末『拳聖』の称号をほしいままにし、病によつて呆気なくこの世を去った。しかし未練も何も無く逝った筈なのに、気が付けば何故か再びこの世に『生』を受けていて……

## プロローグ

あるところに一人の男がいた。

幼い頃から勉強、運動、教養、全てが凡百な取り得のない男だ。

街中で視線を回せば一人は同じ様なのが見つかるであろう、何処にでもいるような平凡な男。

大抵の人は彼をそう認識するし、事実その認識は彼のある一つの能力を除けば間違っていない。

そんな凡人たる彼には、自分には持ち得ないモノを持った幼馴染が二人いた。

一人は、何事もある程度教われれば大抵なんとかしてしまふ、とても器用な秀才。

もう一人は、教わらなくても自分の感覚と閃きで全てなんとかしてしまう、誰もが羨むような天才。

男とは真逆の存在である二人。

そんな二人と男は親友同士だった。

本来なら仲良くするどころか御近づきになることさえ困難であろう二人と、何の因果か家が近く、しかも家族ぐるみの付き合いがある二人と男が仲良くなるのは、ある意味当然のことと言えよう。

二人はいつも人々の中心におり、自分達よりも遥かに能力の劣る男にも、分け隔てなく接してくれる人格者であった。

男はそんな二人に憧れていた。

自分が持ち得ぬモノを持つ二人に。自分より遥かに強く聡明な二人に。

それと同時に、激しく嫉妬もしていた。

何故自分にはあのような輝かしい才能モノが無いのかと。

何故あの二人が簡単にできることを俺はどれだけ努力してもできないのかと。自分を友達として良くしてくれる二人に対し、あまりに

も酷く醜い感情だということも男も分かっている。

だが、そう簡単に割り切れる程男は器用ではなかった。故に男は憧れと親愛と嫉妬の狭間に揺れ動き、複雑な心境のまま日々を過ごす。

そんな男に、ある日分岐点が訪れる。

二人は武道を始めるらしく、一緒にどうだと誘ってきたのだ。

これはチャンスだと男は思った。

格闘技はセンス云々が無くても戦略次第で勝てる可能性は充分あるし、加えて運動神経はともかく純粋な身体能力を鍛えれば、二人の隣に並べるかもしれない。

それに才能がない分、己には根性などの精神力はあるつもりだ。

ある漫画で、『例え試合で負けても、負けた者の心が折れなければそれは真の敗北ではない』と書いてあった。ならば、自分も例え負けても負けを認めず立ち上がり立ち続ければ、可能性はあるということだ。

男は一念発起し、自分も武道を始める決意をする。

あまりにも淡く、儂い希望を抱いて。

しかし神は残酷で、持つ者と持たざる者の差を明確に分ける。

武道を始めてから暫くの月日が経ち、三人が武道というモノに馴染んできた頃だった。

男を差し置いてグングンと頭角を見せる二人。

多くの教わった技を忠実に物にし、手堅く堅実に力を付ける秀才。教わった技を独自にアレンジし、全く新しい武を極め始める天才。対して男は、漸く基礎が出来始めたぐらいで、二人はおるか並以下の習得速度の凡才。

全く同じタイミングで武道を始めたはずなのに、あるのは如何ともし難い実力の開きのみ。

身体能力は流石に鍛えれば伸びはしたが、幾らエンジンが良かろうと機体やパイロットが駄目なら何の意味も為さないように、凡才は

幾度も二人に挑むも回数を重ねる毎に力の差は広がり続けた。天才と秀才の壁はあまりにも高く、本気で打ち込んでいる分、頂が見えない位高く感じられる。

浅はかであった。技術の差がこれほどまでにあるとは思わなかった。それでも、男は見えぬ頂を目指しながら挑み続けた。どンドン遠くなる背中を眺めるだけなのは、もう嫌だったから。

それから更に時が経ち、男の敗北数が三桁を超えた辺りだろうか。男はあの二人と同じやり方では駄目だと悟る。

元々スペックもポテンシャルもまるで違うのだ。二人は基礎どころか応用の応用まで鍛錬が進んでいるのに、まだ基礎を漸く修めた程度でしかないのが、同じ内容の鍛錬を例え数倍の量をしたとしても、全く身に付かないのは当然のことであろう。土台の出来からして違うのだから。

故に男は、別のやり方を模索する。二人に追いつくための何かを。

……いや、その何かは男の手の中に既に存在していた。

それは、まるで無い才能の代わりに渡されたかのような、ある特異体質。

過去、男がまだまだ幼い頃に死にかけたことによって得た、ある種の能力。

才能でどうこうできる領域を超えたその力を使えば、男は二人と肩を並べる為の道を大幅に近道することができただろう。

だが、男はその能力を鍛錬以外で使う気は無かった。

純粋な力で二人と勝負したかった。

純粋な力で二人と肩を並べたかった。

だから男は、勝負事にその力を使わないことにしたのだ。

しかしそうになると、男には才能に勝るような武器が何一つない。

男は考えた。

ない頭を捻り捻って必死に考えた。

勝つ為の術を、己だけの武器を。

何度も倒され、何度も地の感触を与えられながら、考え続けた。

そして、一つを極める天才や多くを修める秀才にもなれない凡才は、  
答えを導き出す。

在る意味当然で、在る意味潔く、在る意味愚かなその答え。

それは、ただ愚直に一つの技のみを鍛え上げることだった。

一点特化の更に一点特化。

近付いて殴るといっただけの基本中の基本にして技ともいえぬたった  
一つの技を、ただただ愚直にひたすらに磨く。

究極の一の創作。

それが、男の出した答えだった。

男は答えが出ると早速、その実現の為に今までしてきた鍛錬を全  
て放棄し、独自に練習メニューを調査、研究。

そして拳をより強く、より速く、より鋭く、より重く突くことに特  
化した体作り……否、正しく肉体改造を開始。

同時に、効率良く相手を粉碎する為のフォームを模索。

失敗を重ねて重ねて重ねて、偶に成功してまた失敗しての繰り返し。  
幾千、幾万、幾億と気の遠くなるほど拳を振るい続け、気付けば5  
年の月日が経ち、男の拳はボクシングの世界チャンプのジャブより  
も速く、そしてフィニッシュブローよりも強くなった。

この一撃があれば勝てる可能性も充分にある。

男はずっと持ち得ることのなかった自信を得て、秀才に挑んだ。

しかし、そんな浅はかな考えは、秀才の技術の前に敗れる。

男は秀才の射程に入る前に、拳よりも射程の長い蹴りを入れられ男  
は敗北を帰す。

甘く見るな、と言外で言われたかのような、手痛い惨敗。

しかし、男は挫けない。

その頃には男にとつて失敗などして当然のモノになってあり、最早親しみ深い友のようなものになっていたのだ。

一度や二度の失敗如きで折れるような繊細な性根をしている訳が無い。

男は失敗を反省し、更に10年の月日を血反吐を吐くような鍛錬と無駄を省く研究に費やした。

何度何度も失敗を繰り返し、その度に修正を加えまた失敗し、数えることが馬鹿らしくなるぐらい失敗と修正を繰り返した。

その結果、男の相手の懐に潜り込む瞬間的動きは、陸上短距離走の金メダリストのスタートダッシュよりも速く、鋭くなった。

得た武器は最強と最速。

これで勝ってみせる。

男は勝利をするための材料は揃ったと、意気込んで天才に挑戦したが、天才は凡才の自信も淡い希望もその努力も、神から授かった圧倒的才能により文字通り打ち砕く。

懐に潜り込んだはいいものの、最強の拳を放つ為に生まれた溜めの瞬間。

コンマ数秒の僅かな隙。

そこを天才は的確に狙い撃ち、男は無残にも散った。

しかも、最速の動きの最中にカウンターを決められた為、衝撃は全て男に跳ね返り、男は生死を彷徨う程の重傷を負う。

何とか命は助かったものの、男は入院することにより筋肉は衰え、抗えぬブランクが生まれた。

天才なら、ブランクぐらいすぐ埋められるだろう。

秀才なら、ブランクをモノともしないような新たな技術を身に付け

るだろう。

だが悲しいかな。男は凡才だった。たった一日のブランクを取り戻す為にも、凡才たる男は3日以上の鍛錬をしなければならぬ。

不幸中の幸いにも後遺症は残らなかったものの、怪我は致命傷故に完治するまでに数ヶ月の時を要し、リハビリや衰えた筋肉を取り戻すことも考えると更なる時を必要とした。加え、鈍った感覚を取り戻すともなると最早再起は絶望的だろう。

男を昔から知る人物達は、誰もが男に言った。

もう止める。

やっぱり才能には勝てない。

お前はよく頑張った。

お前ももう限界だろう。

これ以上は命が幾つかあっても足りない。

男の様を見れば、男を止めようと思うのは当然のことで、事実男も『やはり俺には無理なのか』と心が廃れ折れそうになる。

だが、男は諦めなかった。

否、最早諦めることすら不可能な段階にまで陥っていた。

これまでの生涯を才ある好敵手と肩を並べるために費やしてきた男にとって、二人と肩を並べる願いは、いずれ最強の二文字を渴望するまでに強く熱く変質し、二人を指す道程は憧れを超え、生き甲斐を超越し、男の人生そのもの、使命と思えるまでに昇華されていたのだ。



その考えにまで至ると、男の行動は早かった。

リハビリ期間を能力を使用して強引に短縮させ、1から体の造り直し。

文字通り努力の結晶たる最強と最速を取り戻す為、嘗ての経験を活かしてより効率的に技を磨き、天才との敗因を考えて更なる試行錯誤を繰り返す。

これまでと同じ様に……否、これまで以上の失敗と修正を繰り返し、男はただひたすらに鍛錬に打ち込む。目標を成就させるために。

そして、怪我をしてから15年の月日が経ち、遂に男は完成させる。天才の圧倒的センスも秀才の万能性をも打ち砕く、至高の一撃を。

男は好敵手達に再三勝負を申し込んだ。

二人はそれを当然のように受理する。

この時男達の年齢は40後半と全盛期を既に過ぎているかのように思われた。

しかし二人は男に試練を与えるかのように、秀才は更に技を増やしどんな敵とも戦えるよう万能性を磨き上げ、天才は最強と呼ばれるほど更なる高みへと上り詰めていた。

初めて挑戦してから相当な年月が経っているというのに、衰えることなく寧ろ達人と謳われるまでに武を錬磨した好敵手達に。こんな自分の挑戦を鬱陶しがらずに全力で受けてくれた幼馴染達に。

男は尊敬と感謝の念を胸に秘めながら拳を振るう。

最強の拳と最速の瞬間速度、そして新たに得た0と等しい程にまで削られた最小の隙。

総じて、彼が長い月日を掛けて磨き上げた最高の技は、見事、好敵手達を地に沈めた。

ただ一つのみを磨き上げた凡才の30年にも及ぶ努力は、天才も秀才も一撃で沈める程に至り、男は30年越しの念願を遂に叶えたのだ。

それから男は最強の称号をほしのままにし、数多の挑戦を受けるが負けることはなく、『拳聖』と謳われるまでに世界中にその名を轟かせる。

目標を達成した男は、何時しか好敵手達と共に武の極みを目指すようになり、切磋琢磨し合いながら、若かりし頃から変わらぬ愚直さで鍛錬と戦闘を繰り返した。

夢にもまで見た、二人と肩を並べるながら。

それは初めてと思えるぐらいに充実し、輝ける日々。

しかし、どのような事にも必ず終わりが訪れる。

男は長年の無理が祟り、病に罹った。命にも関わる病だ。

当然、男の周りの人々は彼に引退するよう言い、治療に専念することを勧めた。

しかし、男は引退することは無かった一つの武を練磨し続けた。やっと念願を叶えられ、二人と肩を並べ遙か遠き頂を目指して歩んでいるのだ。

そんな幸せな時をどうして自ら止められようか。

幼馴染にして好敵手の二人も、彼を止めなかった。

男の努力とその成果を身を持って知っている二人に、彼の人生そのものを奪うことなど出来るはずも無かったのだ。

そんな二人に男は感謝し、周りの声を黙殺して更なる高みを目指し続けた。

己の命を削りながらも、ブレる事無く真っ直ぐに。

そしてその数年後。

一人の凡人の長い武道の生涯は、誰にも看取られる事無く静かに幕を閉じた。

男は死ぬ直前まで挑戦者からの挑戦を受け、生涯現役を貫いたという……

一人の凡才が紡ぎ、見事完結した物語。

当初は小さく淡かった『願い』は、徐々に形を成して大きな『生』

そのものにも昇華された。

最後の最後まで己の道を貫き通した男の死に顔は、眠っているかのように安らかだったとか……

## 1話（前書き）

主人公のスペックやらを書こうとしてグダりましたが、どうぞ

## 1話

カーテンの隙間から入る陽光が瞼の上から目を刺激する。

それによりセツトした目覚ましよりも早く、沈んでいた意識が浮上。目を覚ます。

ぼんやりと見慣れた天井を暫く眺め、靄の掛かった思考のまま暫く停止。

懐かしい夢を見た。

俺が『俺』であった頃の過去の夢。

前世というモノを過去と呼べるのかは分らんが、目標に向かって邁進していた日々の思い出。

「そうか……もう12年も経つのか」

目の前まで拳を持ってきて、ジッと見据える。

同年代の子供らに比べて大きな拳。

皮は打ち込みによりガチガチに硬くなっており、拳は傷だらけで拳ダコが出来ている。

大きさや細部はあの頃とまるで違うが、その本質は変わらない。切っ掛けはふとした事。

あるちつぽけな願いの為に始めた、一つの事。

TVで活躍するプロ野球選手に憧れて野球を始めたような、余りにもちつぽけで軽い動機。

だが、気付けば当初の目的は変質し、俺自身の人生そのものとなっていたモノ。

その名は武道。

長く長く、人生の全てを武に捧げ、ただただ目標に向かって走り続けた。

最初は、あの二人に並ぶだけでよかった。何度も挑み、何度も敗れ、その度に更なる鍛錬を積み、また挑んだ。数多の敗北と失敗は確実に俺を強くし、しかしそれと同時に目指す頂の高さを痛感する日々。何度も妥協しようと思った。何度も諦めようと思った。

この身は所詮非才。

あの二人と並ぼうと思うこと自体、烏滸がましいことなのだ、そう思う時だってあった。

だが、諦めきれない。

未練がましく見えるかもしれない。

無様に見えるかもしれない。

しかし、どれだけ罵られようとも俺は歩みを止めなかった。

歩みを止めた者に上を見る資格はない。

故に、遥か高みにいるあの二人の背中を見るには、歩みを止める訳にはいかなかった。

そして気付けば長い月日が流れており、武の道を歩み始めて五年、あの最優の天才と最良の秀才を打倒する為に費やした日月が三十年計三十五年もの年月を経て、俺はあの二人を下し宿願であった最強の座に座ることができた。

しかし、己は自分で思っていた以上に欲張りだったらしく、無謀にも更なる高みを目指した。

武を極める才など無きに等しいというのに、だ。

世界的に有名な天才と秀才を倒した俺に、ひっきりなしに挑戦者が現れ始め、それらを打倒する日々。

その頃からか、形式的な武道に限界を感じ始めたのは。

挑戦を受け続け、時には戦場の空気を感じる為に紛争地帯に足を運んだこともあった。

何度も死に掛け、何度も地に這い蹲り、それでも何度も立ち上がった。

そんな無理が祟ったのか俺は病に罹り、あまりにも呆気なく死んだ。武を極めることはできなかったが、凡才である俺があそこまでやれたのだ。

悔いなどという贅沢なモノなど残していない。

しかし気付けば、俺は何故か『鴉丸夕哉』として再び『生』を受けていた。

……確かに辛く苦しいことだらけの人生であったが、俺はあの結末に満足していた。

なのに何故俺は再び生を受けた？

これが誰かの意図だとしたら、いったい何の為に？  
分からない、謎は尽きない。

ピピピピピ！ピピピピピ！

不意に鳴り響いた目覚まし時計。

それにより俺は追憶から我に返る。

……まあ、考えたところで生を受けた事実があるだけで考える意味など無いし、難しい事を考える頭など俺にはない。

ならばとりあえず、この二度目の生を謳歌させて貰うとしよう。

先程までの疑問を一先ずそう結論付け、目覚ましのスイッチを押してベッドから降りる。

時刻は午前5時。

これから朝の鍛錬の時間だ。

タンスの中から使い古されたジャージを引っ張り出し、寝巻きから手早く着替える。

その後、洗面所へ行き冷たい水で顔を洗って、僅かに残っている眠気を洗い流す。

これでひとまず準備完了。  
学校がある為時間を無駄にはできないので、早々に家を出ることに  
しかしその前に……

「おはよう。母さん、父さん」

玄関に向かう前に茶の間へ足を運び、部屋の片隅にある質素な造りの  
仏壇に両手を合わせて挨拶する。

数年前亡くなった両親のモノだ。

記憶がある分全く子供らしさの無い俺を、気味悪がらずに深い愛情  
を注いでくれた、俺の第二の両親。

朝晩、二人に日々の感謝を込めて挨拶するのが俺の日課となってい  
る。

暫く仏壇に向かって黙祷。二人に祈りを捧げる。

それを済ませた後、玄関へと向かい白のスポーツシューズを履いて  
家を出る。

空を見ると、雲一つ無い快晴。

朝日がとても眩しい。

今日も鍛錬日和、といった所か。

俺は朝日を暫く眺めた後、入念にストレッチをして爪先で地面を数  
度叩き、気分良く走り出した。

\*

家から少し遠くにある山まで走り、そこから登山者が使う凸凹した  
道を駆け上がる。



普通の道を走るより、荒れた道を通った方が様々な筋肉を使って、体を鍛える分には効率が良いのだ。

ペースを乱さずフォームを崩さず、荒れた山道を走り続け、暫くして目的の場所に到着。

山頂付近にある鬱蒼と茂った木々の中で、唯一拓けた場所だ。

此処は昔、暇潰しがてらにこの山を走りながら散策していた時に見つけた場所で、適度な広さと家から程よく離れた距離にある為、お気に入りの鍛錬場として多様させてもらっている。

山道を走ってきた為乱れた息を静かに整え、走る前よりも入念にストレッチ。

適度に筋肉を解した所で、構えを取る。

拳を腰溜めに構えた、正拳突き型の型。

精神を集中し、心を水面のように静かに澄み渡らせる。

そして、その水面に意志という水滴が落ちた瞬間、拳を振るう。

風を切り裂き、ピタリと宙で静止する拳。

当然だが、全盛期とは比べ物にならないほど遅く、鈍く、弱い。

だが嘆く事は無い。

寧ろ楽しみである。

これからどう改良しようか、どれだけ進化するのか、今からでも楽しみだ。

何度も何度も、無心で拳を振るい続ける。

全て全力で。全身をフルで駆動させ、一つ一つの動作を確認しながら。

感覚は経験と共に体に染み付いている。

しかし、感覚に体が追いつかない。

俺の技は元々長年掛けて鍛えた、踏み込みと正拳突きに特化させた肉体があつて初めて成立する技だ。

まだ幼い体では完全には使えない。

なので、この数年間は基礎造りに勤しんでいるのだ。

「精が出るな」

正拳突き回数が両手合わせて200回になった所で、不意に背後から声を掛けられる。

振り返ってみると、そこには黒髪黒目の精悍な青年が立っていた。見知った顔だ。

「おはようございます、恭さん」

「ああ、おはよう」

俺と挨拶を交えた彼の名は、高町恭也。

この町にある喫茶店の息子さんらしいのだが、何故かどう見ても力タギのモノとは思えない剣術を扱う、謎の人物。

彼も俺と同じくこの場を鍛錬場として使っており、数年程前鍛錬中に偶然出会い、その際何かと話が合った為たまに一緒に鍛錬するようになったのだ。

俺は彼を『恭さん』と呼んで、親しくさせて貰っている。

恭さんは俺と軽く言葉を交わしながらストレッチをし、それが終わると持ってきていた細長い巾着袋から木刀を二本取り出す。

彼の流派は特殊な流派のようで、二本とも従来の木刀よりも短い。

確か小太刀二刀流、だったか？

よくわからないが、とても特殊な流派だと聞いたが……確かに普通の二刀流とは違う動きだ。

木刀を鋭く振るう恭さんの姿は身軽で、刀を振るう侍というよりは、忍びのような動きをしている。

これは何がどのように発展してできた流派なのだろうか？

少なくとも、間違っても喫茶店の息子が振るっつていいような剣ではない。

少しばかり興味をそそられるが、凡才の俺には他人を気にしている時間すら勿体無いので、意識を切り替えて拳を振るい、各々鍛錬を続ける。

それから暫く時間が経ち、日が本格的に空を明るく照らし始めた頃、ふと恭さんが声をかけてくる。

「いつも正拳突きしかしてないが、他にはしないのか？」

「一度に幾つモノことをして身に付く程、俺は器用じゃないんで」

「そうか……所で手合わせしてみないか？」

藪から棒にそんなことを言ってくる。

脈絡も何も全くない。

恭さんは何故か事あるごとに、俺と手合わせをしようとしてくるのだ。

昔あまりにも誘ってくるし、実力に隔てりのありすぎる俺に恭さんが手合わせを願う意味が分からなかったので、理由を聞いてみたところ「剣を持つ者として、お前の戦い方は興味がある。お互いにい経験になると思うが？」と言っていた。

何か納得はできないが、正直、確かに心惹かれる申し込みではある。恭さんは鍛錬風景を見る限り、相当な実力の持ち主なのだろうことは一目瞭然だ。

身のこなし、剣の振り、眼光、それら全てが今まで見てきた剣士達の水準を遥かに上回っている。

鍛錬風景を少し見ただけでこう思えるのだ。実際はどれだけの強さ

なのか、武に携わる者として気にならない訳がない。

昔はまだまだ俺の突きが形になっていなかった為、断っていたのだが……

しかし、今はどうだろうか？少しはそれっぽくはなってきた。

それに実戦に勝る経験はない。

ここらで自分の力がどれだけのモノか確かめるのも、悪くないかもしれない。

そう結論付けた俺は、頷く。

「構いませんよ」

「本当か！」

「ええ、此方としても漸く形に成ってきましたんで、そろそろ試したいと思っていましたんで」

「よし、なら早速やるか！」

そう言うや否や恭さんは少し距離を取り、深呼吸する。そして、短い木刀二本を構える。

……成る程、素晴らしいとしか言いようが無い。

構えと対峙した雰囲気だけで理解できる。

彼が自分の予想を上回る強者であるということ。

この若さでこれほどの使い手とは……前世でも数える程しか見たことがない。

恵まれた才能を慢心せず磨き上げ続けたのだろう。

そこに一切の無駄は存在しない。

胸中で深く感嘆しながら、ならば俺も期待に添えるよう今出せる全力を出そうと、両腕をダラリと下げ足を肩幅程に広げる。

この構えとは言えないような構えが、俺に最も適したスタイル。

一見隙だらけに見えるだろうが、事実この構えは隙だらけ。

防御に一切意識を傾けていないのだから当然だ。

構えとは防御の型。我が拳に構えはない……という訳ではないが、

攻撃は最大の防御を旨とする俺に、防ぐという意識は無い。

攻撃は躲してカウンターを打つか打ち落とす、防御すら全て攻めの姿勢。

この攻めの一点特化こそが俺のスタイル。

必要なのは集中力と精神力。

例え戦場であっても、体を緊張で強張らせないで、完全な脱力を維持する。

恭さんは俺の構えを不審に思ったのか、攻め込んでこない。

そのまま暫く、互いに牽制をしながら睨み合う。

「どうした？来ないなら此方から行くぞ！」

埒が明かないと思ったのか恭さんはそう言つと、身を深く沈めて地を這うように駆ける。

その速度は予想を超えて途轍もなく速い。

揺るぐな、集中しろ。

力を入れるな、まだ早い。

脱力した状態を維持し続け、闘争本能で熱くなりそうな頭を理性で無理矢理冷やし、敵を静かに見据える。

焦らず逸らず間合いを測り、その時を待つ。

そうしている間にも恭さんは更に加速し、互いを隔てる空間を侵食し、木刀を振るう為に小さく構える。

今！

恭さんが俺の射程距離に入った瞬間、細胞から筋繊維に至るまで、全身の機能を一齐にフル稼働。

脱力した体に瞬間的に120%の力を注ぎ、無拍子で鋭く踏み込み相手との距離を一瞬で詰め、懐に潜り込む。

恭さんの顔が驚愕に染まる。

しかし気付いた所で遅い、遅すぎる。

狙いはカウンター。

速度と、体重と、地を踏み抜いて得た力全てを拳に流し込み、これもまた無拍子で放つ。

最小の隙と最高の速度と最強の拳の三位一体。

それこそが、俺が前世で編み出した最強にして唯一無二の技。

名を『絶拳』

躲せるタイミングではない。

初見で躲されるような技ではない。

この技のコンセプトは一撃必殺。

喰らえば立てる者など皆無に等しい。

体格や筋力の影響で一撃で決められる可能性は高くはないが、その威力不足を補うためのカウンターだ。

決まれば、間違い無く沈めることができる。

俺は容赦無く拳を振り抜く。  
放たれた絶拳は、恭さんの胸部を貫き、彼の膝を地に着かせる……  
ハズだった。

しかし、拳に手応えは何も無い。  
あるのは風を切った感触のみ。

俺は驚愕に目を剥く。

その視線の先に、恭さんの姿はない。

それは俄かに信じられない光景だった。

当たるハズであった拳を、恭さんはまるで体感速度が倍になったか  
のような動きで、躲したのだ。

その動きはまるで……

そこまで考えた所で、首筋に灼け付くような感覚。

直感が身の危険を警告する。

しかしそれを察知した瞬間、既に視界の端に影が。

正体は勿論恭さん。

気付いた頃には凄まじい速度で俺の間合い内まで切り込んできてお  
り、俺が反応する暇も与えず、恭さんはその木刀を鋭く振り抜いた。  
胸部を貫くような衝撃が抜け、まだ体重ウェイトの軽い俺は耐えきれずに弾  
き飛ばされる。

一矢すら報いられなかったか……

久しく味わっていなかった苦々しい敗北の味を感じながら、俺は背  
中から地に叩き付けられるように倒れた。

\*

早朝の山奥。

昨日鍛錬を少し厳しくした為、休みを取らせた美由希を置いてきた俺は、現在ある少年と対峙していた。

鴉丸夕哉。

数年前に偶然この場所で出会った少年。歳は妹のなのはより少し上くらいだろうか？しかし纏う風格は小学生の其れではない。

最初はただ頑張っている少年、という印象でしかなかったが、その纏う雰囲気と鍛錬風景を見て俺は興味を持った。

子供とは思えない鋭い正拳突き。

筋力任せでは無く、洗練され磨き抜かれたその打ち込みの姿に、無骨ながら美しさを感じた。

それ故に、夕哉が子供らしからぬ雰囲気と態度をしているというのも少なからずあるが、相手が子供ということも忘れて武人としての血が騒いでしまった。

気になった。

あれほどの拳を振るう者が、どんな戦い方をするのか。現時点で、どれほど強いのか。

だから手合わせ願った。

しかし夕哉は断る。

曰わく「まだマトモに戦える段階では無い」らしい。

数年前から頼んでコレなので、今回も断られるだろうと思っていたが、まさか了承されるとは思わなかった。対峙する夕哉を見る。

彼の雰囲気が変わっていることに気付く。

武人特有の空気。



肌がピリピリする、心地良い緊張感  
それに呼応するように俺は深く息を吐き、意識を戦闘の其れに切り替える。

勿論、全力を出す気はない。  
手加減をして、夕哉の全力を引き出す。  
しかし、決して手は抜かない。  
やるからには本気でやる。

俺は木刀を二本構え、夕哉を見据える。  
正拳突きをしていたことからつきり空手の使い手かと思っただが、  
構えからして違っらしい。

いや、アレは構えと言えるのだろうか？

ただ仁王立ちしているようにしか見えない。

それに隙だらけだ。

もしかしたら、夕哉はちゃんとした指導者の下で鍛錬していないの  
かもしれない。

そんな考えが頭を過ぎったが、しかし何故だろうか。

一見隙だらけに見えるその構えに、迂闊に踏み込むのは危険だと感  
じるのは……

そのような予感から俺は動かず、夕哉も此方の出方を窺うように静  
かな目で微動だにしない。

そのまま暫く、時が経つ。

……このままじゃ埒が明かないな、俺から仕掛けるか。それに、夕  
哉がどういつ手段で俺を迎撃するのか楽しみでもあるし。

「どうした？来ないのなら此方から行くぞ！」

身を低く沈め、夕哉目掛けて駆ける。

さあ、どう出る？

脳内で彼がどのような手段を取るか予想をし、更に加速。

そしてその直後に、俺は夕哉を甘く見過ぎていたことに気付くことになる。

俺が間合い内まで距離を詰めると同時に、夕哉は何の前触れもなくそれ以上の速度で踏み込み、気付いたら間近にまで拳が接近してきた。

ッ！？速い！！

背筋を伝う悪寒。

警報を鳴らす本能。

直感的に悟る。

この拳は喰らったらマズい、と。  
その直感に従い俺は意識を集中し、脳のリミッターを解除。知覚力を爆発的に高める。

すると、俺の視界が全てモノクロになり、ありとあらゆるモノの速度がスローモーションに見える。

無論、夕哉とて例外ではない。

突き出された拳を寸での所で横に跳ぶように回避し、その流れのまま夕哉に接近、木刀を振り抜く。

拳を突き出したままの隙だらけの格好……所謂死に体である夕哉にそれを防ぐ術があるはずも無く、胸部に鋭い打ち込みをモロに喰らい、弾き飛ばされる。

手に伝わる、鈍い感触。

後方へ大きく弾かれた夕哉は、受け身すらマトモに取れず、そのまま地に落ちる。

そこで色彩の戻った視界の中、漸く俺は我に返った。

遂、手加減を忘れて打ち込んでしまった。

咄嗟に急所は外したが、それでも打ち込んだのは硬い木刀だ。

下手をすれば大怪我をさせてしまったかもしれない。

最悪の事態を想定し、慌てて彼に駆け寄る。

「おい！大丈夫か！？」

倒れる夕哉の様子を見ようと片膝を着いてしゃがみこむ。

その直後に、夕哉はガバツと、

突然体を跳ね起こす。

思わず身を引く。

夕哉は胸が痛むのか少し眉を歪めると、自分の拳を見つめ、

「チツ、威力も速度もまるで駄目……力の伝動に無駄があるし、

何より純粹に土台がまだまだ……」

何やらブツブツと独り言を言い始め、不意に空を見上げ何かを確かめるように目を細める。

そして此方を向き、

「恭さん、一手御教授有難う御座いました。俺は学校があるので今日はこれで失礼します」

そう言って頭を下げると、山道を下って走り去っていった。

その姿に怪我をした様子は見られない。

あまりにも勢いよく去っていったので少し呆気に取られてしまったが、怪我也何もなさそうなので安堵する。

「それにしても、凄まじい踏み込みと拳だったな……まさか小学生相手に神速を使うことになるとは……」

先程のことを思い出す。

あの踏み込み……瞬間最高速度だけなら神速を使った俺にも匹敵する。

成る程、この為に正拳突きのみを鍛えていたのか。

無駄を省き、鋭さと威力に特化した拳。

何の予兆も無く最速でその拳を相手に叩き込む……単純だが、それ故に強い。

もしも美由希と戦わせたらどちらが勝つだろうか……面白そうだ。今度戦わせてみるか。

それにしても……

木刀を見やる。

手には、まだ夕哉を弾き飛ばした感触が残っている。

鈍く重く芯まで響くような感触だったのだが、彼はケロリとしていた。

技を使わないで急所を外したとはいえ、全力の一撃を喰らったにも関わらずピンピンしているとは……小学生とは思えない頑強さ（夕フネス）だ。

「……俺も負けてはられないな」

俺は一人そう呟くと、強敵と出会えたことに喜びを覚えながら、誰もいなくなつた山奥で鍛錬を再開した。

## 1話（後書き）

絶拳の能力を刃牙で例えるなら

ゴキブリダツシュ×音速拳×剛体術∥絶拳

うん、チートですね。

## 2話（前書き）

強引な展開ですが、どうぞ。  
ああ、早く原作まで行きたい……

## 2話

恭さんと別れ一度家に帰ってきた俺は、とりあえずジャージを洗濯機に入れ、シャワーを浴びて汗を洗い流す。流石に汗臭いまま学校へは行きたくない。

シャワーを浴び終え、タンスから出しておいたジーパンと黒いTシャツを着ると、台所へ向かい冷蔵庫の中身を調べる。

見事にスツカラカン。

そういえば昨日、冷蔵庫に中途半端に食料が残っており、面倒だからという理由で全部鍋にぶち込んで食したのだった。なかなか愉快な味に仕上がっていたな、アレは。

仕方ない、手間だが今日学校から帰ったら買いにいこうか……と考えながら、買い溜めておいてあるカロリーメイトとウィダーinゼリーを食し、ランドセルを担ぐ。

肩にズツシリとのし掛かる重み。

教科書による重みではない。

教材は全部学校の引き出しの中に叩き込んである、所謂置き勉というヤツだ。

なら何が入っているのかというと、ダンベルなどの重りだ。

早めに全盛期と同じぐらいまでに絶拳を使えるようにしたいので、

日常でも鍛錬をできるようにしているのだ。

常住戦陣ならぬ常住鍛錬。

なかなか語呂がいい。これを座右の銘にでもしようか。

そんな割とどうでもいいことを考えながら、スニーカーを履いて俺は家を出た。

\*

児童数総勢600人以上の、どこにでもあるようなごく普通の学校。市立海鳴第一小学校。

それが俺の通う学校の名だ。

俺はその六年生であり、のんびりとした学校生活を謳歌している。といっても、肉体に精神が引っ張られて思考が多少幼くなっているとはいえ、根本的に精神年齢が違う為皆とは話の内容もテンションも合わない。

なので、俺は基本的に皆から一步引いた位置から、子供らを纏めたり御したりする立場に立っている。

さて、今日ものんびりとハンドグリップで握力を鍛えながら勉学に勤しもうか。

\*

そうこうして学校が終了し、仲の良い友人グループで下校。

その途中、ジャンケンで負けた奴がランドセルを一人で持つ、という遊びをグループのリーダー格の少年が考案し、

見事負けたリーダー格の少年が俺のランドセルを持った瞬間地面に叩き付けられるという事件があったが、それ以外特に何事も無く帰宅。

朝着たジャージとは別のジャージに着替え、タオルと財布を持って買い物へ向かうことに。

本当は下校の途中で買いに行った方が楽なのだが、俺の通う学校は原則下校中の寄り道を禁止している為、出掛けるなら一度帰らなければならぬのだ。



これは数年前、私立聖祥大附属小学校の生徒二人が下校途中に拉致未遂に遭ったことから、このような決まりになったらしい。その拉致未遂事件には俺の父親も深く関わっていたのだが、まあそれはいつか語る時が来るだろう。

## 閑話休題

いつものスポーツシューズを履いて外に出た俺は、ストレッチをした後ランニングがてらし遠くにあるスーパーへと走り出す。近場にもスーパーはあるが、今から向かう所の方が適度に距離があり、品揃えや質が良く、何より安いのだ。

住宅地を抜け、街中を走る。

まだ日が高い為、彼処には遊びまわる子供や散歩をする老人などの平和な光景が目に入る。

こういった風景を楽しむのも、ランニングの醍醐味の一つだと俺は思う。

それから暫く走り続け、目的地であるスーパーに到着。

額から滲む様に出ている汗を財布と一緒に持ってきたタオルで拭い、スーパーに入りカゴを手取る。

早めの時間の為か、店内には夕方の時ほど客はいない。

俺は今日の晩飯は何にしようか考えながら、食料品コーナーを適当に歩く。

ふむ、今日の特売品はジャガイモに玉葱、人参、ピーマン、キャベツか。

後は鶏肉も安いな。よし、今日はカレーにするとしよう。

献立が決まった所で、必要な材料をカゴに入れていく。

今の俺に必要なのは体を作ること。

なので肉を多めに買い、且つ栄養バランスに偏りがないよう野菜も色々入れていく。

それから、買い溜めであるカロリーメイトとウィダーinゼリーの量が少なくなってきたのを思い出したので、ついでに買っておこうと機能性食飲料品コーナーに足を運んでみる……が、無い。

オレンジ色の箱も様々な色のパックも何一つ無い。

アレらが売り切れるなんて珍しいな、と思いながら、仕方ないのでさっさと会計を済ませようとレジへと向かう。

その途中、ふと調味料コーナーで車椅子の少女が、上の棚にある塩に必死で手を伸ばしている姿を見かける。

茶色の髪を肩ぐらいまでに伸ばした可愛い少女だ。

膝の上に買い物カゴを乗っけており、片手で落ちぬよう支えてはいるが随分と不安定に見える。

周りの者はそれに気付かない筈もないのだろうが、誰も手を差し伸べようとしない。

やれやれ、薄情な奴ばかりだな。

俺は息を一つ吐くと、調味料の棚に近寄り少女の手の先にある塩を取る。

「コレでいいか？」

「え……？」

「取りたいのはコレでいいのかと聞いている」

「あ、ハイ」

「じゃあホレ」

塩を少女のカゴの中に入れ、ついでにそのカゴを手を持つ。

大量の食材や調味料、洗剤や歯磨き粉などの生活用品の入ったカゴは、俺からすればまだ軽い部類だが、少女が持つ分には些か重い。これをずっと膝の上に置いておくのはキツイだろう。

「え、あの……」

「この量、膝の上に置いておくには重いだろ。持とう」

「そ、そんな、あかん、流石に悪いわ！」

「気にするな、俺は気にしない」

そう言って返答を聞かずにさっさと歩いていく。

少女は慌てて俺の後を追いかけてくる。

「それで、他に何か買う物はあるのか？あるなら取ってくるが……」

「あの、本当に迷惑じゃ……」

「迷惑ならまずこんなことはしない。遠慮し過ぎだ。いや、寧ろ迷惑なら止めるが……」

「うっん、寧ろ助かるわ！」

「なら素直に厚意を受け取るときな。恩を売るわけではないがな」

というか、自分でも不思議だ。

何故俺はこの少女にここまで肩入れする？

確かに不憫だとは思ったが、ここまでする義理立てはない。

人並みの良心はあるつもりだが、俺は別にお人好しというわけでもない筈。

なのに、何故……

「あの、どうしたん？」

「ん、ああ、なんでもない」

つい考え込んでしまっていたか。

少女の方を見てみると、何やら心配そうに此方を見ていた。

……やれやれ、心配して手伝うというのに、此方が心配されてはどうしようもないな。

内面で迂闊な自分に呆れながら、彼女に尋ねる。

「それで、何が必要なんだ？」

「あ、えっと、ジャガイモに人参に玉葱、後は牛肉にしょうか豚肉にしょうか……」

「……カレーか？」

「おお、ようわかったな」

「俺も今日はカレーにするつもりだったからな。ちなみに肉は鶏肉

のチキンカレー」

「君って料理できるん？」

「簡単なのならな」

俺は料理に関しても非才ではあるが、料理が作れない訳ではない。確かに一流のレストランなどの料理を作るには才能が必要になるが、家庭の味を作るのに才能など不要で、知識と経験と思いつき遣りがあれば割と誰でも作れる物なのだ。

「へえ、少し意外やね。君って如何にも体育会系な感じするのに」

「外見に似合わないことは自覚している。そう言ってお前はどうかんだ？」

「自慢やないけど、めっちゃ得意や」

少女は無い胸を精一杯張ってドヤ顔をしてくる。  
何か微笑ましい。

俺は自分の頬が少し緩むのを感じながら、

「その歳で既に料理ができるのか。偉いな、手伝いか何かでもしているのか？」

「あ、信じてないな？失敬な。全部一人でできるっちゅーに」

「ほう、それが本当なら大したモノ……」

そこまで言った所で、ふとある違和感が脳裏に引っ掛かった。

「……そういえばお前、一人で買い物をしているのか？」

「ん？そうやけど……どうしたん、いきなり？」

……おかしい。

車椅子の……それもまだまだ幼い少女に、普通一人で買い物をさせるか？それもこんな量を。

そういうのは、家の健常者などがやるモノではないのか？

それに料理を一人で全部できる、と言っていたが、それはつまり包丁や火などを扱うということ。

それらは子供が扱うには危険すぎる代物だ。

親や大人がいるのなら普通許す筈もないと思うのだが……

「……まさかお前……」

「ん？なんや？」

「……いや、何でもない」

「？」

出掛けた言葉を飲み下し、代わりに誤魔化しの言葉を吐く。

少女は不思議そうに首を傾げるが、特に言及はしてこなかった。

……これはあくまで俺の予測でしかない。

杞憂ならそれで良し。

例え当たっていたとしても、俺のような他人が首を突っ込んでいいようなことでもないし、彼女にとって辛い事なのかもしれない。

なら、無闇に藪を突つく必要性などどこにもないだろう。

「それよりまず何を買っただ？」

「ん〜、まずは野菜からかな」

「そうか、では行こうか」

軽く言葉を交し、気を取り直して買い物続ける。

先程の雑談で俺に慣れたのか、必要なものをカゴに入れながら、彼女はフランクに色々な話を俺にし、色々なことを俺に聞いてきた。

終始楽しそうに笑顔で。

俺などの話など楽しくもなんともなかるうに……初対面だというのに、よくもまあこんな得体の知れん男に色々と話せるモノだ。

精肉コーナーで、牛肉と豚肉のパックを両手に持って真剣な目で見て比べている少女を見やる。

……それにしても、口下手なつもりでもないが口が達者でもない俺が、初対面の少女とこれだけ話せるとは……いや、それは彼女の人の柄故、か……

悩んでいる少女の視界内にさり気無く鶏肉という第三勢力を送り込みながら、そう思う。

出会ってからほんの少ししか彼女と接していないが、明るい笑顔と振る舞いで、この少女が人懐っこい性格だということは理解できた。

……それと同時に、何かに飢えているということも。笑顔の最中、時折哀しげに揺れる瞳。

瞳の奥に巢食う、魚の感情。

あれは、いつたい……

「うん、こんなもんかな。それじゃあ会計いこか」

「……………わかった」

鶏肉のパックをカゴに入れ、少女は車椅子を動かして少し先に行く。

何かが引っ掛かる。

俺はあの目を知っている。

どこかで見たことがある。

なのに、詳しい情報が思い出せない。

俺は彼女の傍を歩きながら、気取られぬよう脳内の記憶を漁る。

「そついえば君も随分と買っみたいやけど、お使い？」

「お使いではないな。」

第一、家族のいない俺に誰がお使いを……………」

「え……………」

……………考え事に集中しすぎて何かしくじった気がする。

「家族がいないって……………？」

……………さて、どうすればいいか。

彼女は年不相応に聡い印象を受ける。

あの発言から色々俺の家の事情を察していることだろう。

下手な発言はマズい。

なので俺は、

「ああ、数年前に両親が、な。だから俺は一人暮らしをしているのだ」



平常運転で乗り切ることにした。

変に誤魔化したり無駄に明るく話しても、彼女は自分の発言を責める可能性があるから、敢えて気にしていないことをアピールする為、いつも通りの態度を取る。

「そう、なんや……わたしと一緒にやね」

彼女の瞳が哀しげに揺れ、寂しげに微笑む。

その目と微笑みが、脳裏にある昔出会った少女の表情と重なる。家の事情を幼いながらに理解して、寂しいのを我慢し誰にも迷惑をかけない『いい子』になることを己に科していた、可愛らしい栗毛の少女に。

それならば、この少女も飢えているのか……温もりに……

なれば、俺にできることは何かあるだろうか？

このような少女が孤独に震えるのは、納得できない。栗毛の少女には、頭を撫でて色々な話をしてやった。手の平の温もりというのは存外馬鹿に出来ないもので、彼女はそれから『いい子』という仮面を被らなくなった。

ならば同じようにしてみようと思い、軽く手を持ち上げようとするが、今俺は自分のカゴと少女のカゴを両手に持っている為、そのようなことはできない。ならばどうしようかと少し考え、

「鴉丸」

「え？」

「鴉丸夕哉。それが俺の名だ」

とりあえず彼女と知り合いになることにした。

「……そういえば、お互い自己紹介がまだやったな。わたしは八神はやて。

よろしゅうな、かー君」

「ああ、よろしく」

名の交換は最も簡単な繋がり作り方だ。

薄い繋がりだろうが、あれば多少は孤独感も薄れるだろう。まあ、それはそれとして。

「それより八神よ、かー君とは？」

「鴉丸、つまりカラスやからかー君や。ええあだ名やる？」

随分と安直だな。

しかし、少女……八神が楽しそうに微笑んでいるから、まあいいだろう。

それにしてもあだ名、か……そう言えば、昔にも付けられたことがあったな、あの栗毛の少女に。確か、ゆー君、だったか。

今思えばこれも随分と安直だな。

「まあ、いい。それじゃあ会計に行こうか」

「せやな、かー君」

「……」

クスクスと悪戯っぽく笑いながら、八神は歩き出した俺の後を付いて来る。

八神が元気になったのはいいが、何だろうか、このむず痒さは……

背筋がムズムズする感じに苛まれながら歩いてレジに付くと、運良く誰も並んでいないレジがあったので、そこで会計を済ませる。

流石に支払いは別々。

男なら全部払えと言う奴もいるだろうが、俺は両親の遺産で生活しているので無駄な出費は避けたいし、何より彼女はそんなこと望まないだろう。金を支払って店員から袋を貰い、カゴをレジ近くに備え付けられている台の上に乗せ、袋の中に食材などの買った物を入れていく。一人暮らしをするようになった当初は入れ方がよくわからず、適当に食材を入れて帰ったら生卵が割れていた、という事態が頻繁に起こっていたが、ここ最近は規則性を覚え効率よく入れられるようになった。

やはり何事も経験が大事ということか。

ついでに八神のもしてやろうと、視線を八神のカゴに移す。

しかし、そこにあるのは空のカゴ。

あれほどあった食材の山は見当たらない。

「どうかしたん、かー君」

無くなった物を探していると、八神の悪戯っぽい声が聞こえる。

そちらを見てみると、膝の上に綺麗に鎮座された袋。

強引に入れて辛うじて入っている、といった歪な俺の袋とは違い、

八神の其れは理路整然として全ての物がちゃんと袋に収まっており、まるで意思があるかのように八神の膝の上に立っている。

「それは、お前がしたのか？」

「他に誰がいるん？」

「いやはや、器用なものだな」

「わたしが見るにかー君が不器用なだけやと思っけど」

「ごもつとも。」

「まあいい、それでは用も済んだし帰るとしようか」

「あ……」

俺がそう言つと、八神は別れを惜しむかのように目に見えて暗い顔になる。

俺は特に気にせず買い物袋片手に出口へと向かい、その際八神の膝の上にある袋も手に取る。

「え？」

「どうした、呆けた顔をして。送っていくぞ？」

意味が理解できていないのか、八神は暫く呆然とした様子で此方を見て、しかしみるみるうちに暗い顔から明るい顔になっていき、

「な、何やかー君、意外にも紳士さんやな。」

まあ確かに、こんな美少女を一人で帰らせるのは男としてどうかと思っけどなあ」

「そっだな」

「かー君アカン、アカンで今のはツツこまな！

自分で美少女言っんかい！とか、自分何様やねん！とか色々あったやろ！」

「客観的に見ればお前は美少女相違ないし、重い荷物を持つ少女を一人で帰らせるのは、男としてどうかと思っけのは同意すべき点だと思っけが」

「び、美少女！？」

八神の顔が茹で蛸のように真っ赤になる。

自分から言っけたことだろっけに肯定されれば照れるか、面白いな。

しかし、店内でこんなやり取りをしている為、周りの人達に何か微笑ましいモノを見るかのような視線を送られている。

正直、居心地が悪い。

なので俺は袋を腕にぶら下げて、未だ顔を赤くしている八神の車椅子を押して店内から出た。

\*

スーパーを出るとまた色々と話しながら、俺と彼女は帰路に着く。

その時の彼女は本当に楽しそうっけ、まるで今という時間を精一杯堪能しているようだっけた。

しかし楽しい時間というのはすぐ過ぎるのか、ただ単純に彼女の家が近場にあったのかは知らないが、俺達はあつという間に八神と書いてある表札の家の前に着いた。

「着いた、ここがわたしの家や」

「ふむ、存外でかいな」

「そうか？まあ、確かに一人で暮らすには過ぎたでかさやけどな……掃除とか色々大変やし……」

……まずい、また何か地雷を踏んでしまったようだ。

心なしか八神の背に暗い霧が出現している。  
俺は内心で若干焦りながら、しかし表面上は微塵も揺るがずに話題を変える。

「それより、コイツはどうすれば？」

「どうせわたしはチビで将来性ゼロ……ああ、ありがとつな、じゃあ後はわたしが……」

ダークサイドから復帰した八神はそこまで言った所で何か思いついたような顔になり、上目遣いで俺を見ると、

「あの、お礼つてわけやないけど、せつかくやし晩御飯家で食べていかへん？」

おずおずと提案してくる。

しかし気持ちはありがたいが、流石にご馳走してもらうのは気が引

ける。

なので気持ちだけ受け取って断ろうと、八神の目を見据える。

不安そうに、揺れる瞳。

俺は思わず言葉に詰まる。

八神はまるで捨てられた子犬のような目で俺を見ており、このような目をされては断るといふ選択をできる筈もなく……

「そうだな、では御相伴に預らせてもらおう」

「ホンマ!?!」

「嘘を言っても仕方ないだろう」

「じゃあ入って入って!」

どこか嬉しそうに八神は家の中へ入っていく。

その様子に苦笑しながら俺も後に続こうとし、立ち止まる。

背後から視線、気配。

敵意は感じられない。

しかし好意的ではないことは確か。

静かに両手の袋を地面に置き、全身を脱力。意識を切り替え、ふり返る。

しかし、そこには誰もいない。

塀の上に猫がいるだけ。

……気のせいか？

首を傾げながら、気配を間違うとは、俺も衰えたか……などと十代前半の少年とは思えない眩きを胸中に落とし、俺は荷物を拾って八神の後へ続いた。

その背中を、猫がジッと見ていることに気付かずに。



## 2話（後書き）

少しずつフラグを建築させるつもりが、何故一気に立ってしまったし……

塩を取ってあげた段階で終わりにするつもりだったのに……

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5425z/>

---

魔法少女リリカルなのは～全てを穿つ凡才の拳～

2011年12月31日02時48分発行